

ムスリム・アイデンティティの再構築と越境空間の生成

——在北タイ中国雲南系ムスリムの故地とのつながり

王 柳蘭

はじめに

従来、移民社会の社会的結合とそれに基づく地域社会についての議論は、彼らの集団に内在する共通の論理と文化的同質性によって説明される傾向があった（濱下 2006、吉原編 2002）。その特徴として、移民集団の凝集性と連帯が強調され、とくに民族集団内部の相互関係に議論が収斂されがちであった。それに対して、移住に伴う多元的な関係性のなかで、移民がその時々の歴史的状況に直面しながら、異質な民族や集団と接触や交渉を行い、どのように自

集団や他者と社会的紐帯を結び、切断し、あるいは復活させながら文化的社会的空間を生き抜いてきたのかについての議論は十分にされてこなかった。本稿では、民族集団内外の自己関係を軸に展開される相互行為に着目し、越境者が主体的に自らの生活世界の足場を作り、さらに可変的にその空間を作り変えていく諸相をミクロ・リージョンとして捉え、その動態的な生成過程について記述していく。

北タイの雲南系ムスリム^{*}は、一九世紀末より中国、ビルマ、タイの地域間・国家間変動を経て越境し、その集団内部も異なる移住背景を有するサブ・グループに細分化されている。移住形態は交易、戦争、避難といった諸要因によって時代ごとに変化してきた。社会階層も、商人、軍人、一

般民衆などの違いがある。したがって、多様な歴史的差異を内包する集団としての雲南系ムスリム社会は、その差異ゆえに不均等なネットワークや空間の形成がみられる。その空間は同時に異質な民族や社会との接触と相互交渉のなかで生成されてきたのであり、中国における既存の社会とは異なる。

本稿では、北タイにおける雲南系ムスリムの移住波のなかでも、二〇世紀半ば前後の動きに着目し、とりわけ商人層の動きに焦点を当てる。そして商人層のネットワーク形成の動きを、越境過程に彼らが遭遇した戦争の歴史的経験から捉え、彼らが避難・戦争という非日常的な危機状況下においてどのように他者と関係性を結び、自らの社会的紐帯を変化させてきたのかをみていく。とくに、彼らの人生の命運に変化を与えた雲南系漢人との接触が雲南系ムスリムのミクロ・リージョンの生成にどのような影響を与えたのか、またそれが今日故地とのコミュニケーションにどのように作用しつつあるのか論じていく。

I 北タイと雲南系ムスリムの移住

雲南に出自をもつムスリムがタイ社会とつながりを本格的に持ち始めたのは、一九世紀以後に活発化する中国と東

南アジアを結ぶ地域間交易においてであった。西欧列強のイギリス・フランスによるビルマ・インドシナの植民地化を契機として、中国にいたる近道として雲南の交通路が注目を浴び、雲南系ムスリムは馬やラバのキャラバン隊を構成し、中国、ビルマ、ラオス、タイの交易品を域内外に運んだ(栗原 1991; Hill 1998)。交易で財を築いた雲南系ムスリムのなかには、タイに定着化を進める人たちが出てくるようになった。その結果、彼らは早くて一九世紀末、遅くとも一九一七年にはチェンマイ市に最初の雲南系ムスリムのモスクであるバーン・ホー・モスクを建立した。こうして一九世紀末から二〇世紀前半までの間に北タイに定着を始めたグループが雲南系ムスリムの先駆的移住者となった。ここでは、その動きを移住の第一波と呼ぶ(王 2008c)。

この第一波以後、交易以外の要因で雲南を離れビルマやタイに定着していく雲南系ムスリムは増加する。そのひとつに雲南の大理に拠点をおいた杜文秀が一九世紀後半に清朝と対立し、戦いにやぶれた末裔がビルマに形成したムスリムコミュニティがある。ビルマに定住した彼らは、定着先のパンロンという地名にちなんでパンロン人(Panglong)と自称する。彼らはビルマで商人に転向し、交易で財を成す。しかし、イギリスによる植民地化や日本軍の進出によって村落は崩壊し、離散の運命をたどる。彼



図1 本稿でとりあげる西南中国と
東南アジア大陸部の主な地名

らの末裔はビルマに点在しているほか、北タイや台湾にも再移住している。このようにビルマに土着化し、さらにビルマをめぐる国内外の政治的、経済的諸要因によってタイへ再移住した人々がいる。これが第二の移住波である。

第三の移住波は二〇世紀半ば前後である。この時期の移住者が今日の北タイ雲南系ムスリムコミュニティの圧倒的

多数を占める。移住の理由として最も多いのが、一九四九年の中華人民共和国成立前後に伴う混乱と政治的不安によるもので、大量の避難民が中国から台湾や東南アジアに流れた。そのなかに雲南系ムスリムも含まれ、その一部が北タイに定着したのである。

このように北タイにおける雲南系ムスリムは、中国、ビルマを含む国際関係・国内の諸事情が複雑に絡み合って移住が促されてきた。その歴史的差異は彼らの生活拠点にも反映されている。初期の移住者はかつて地域間交易地として栄え、現在では地方都市として発展しているチェンマイ市やチェンラーイ市に定着した。他方、後発移住者となる第二と第三波の移住者は、政治的・軍事的・経済的理由から中国やビルマを出国し、移住当初は地理的条件の悪いビルマ・タイ国境の山岳地域に定着した。とりわけ、国境沿いでもチェンマイ県、チェンラーイ県に集中し、一九五〇年代以後に集落が形成された。それらは「難民村」と呼ばれている。「難民村」が形成された要因は、後述する雲南系漢人を主体とする国民党軍人の南下が大きく影響している(Chang 1999)。筆者は国境沿いに点在する雲南系漢人とムスリムの集落を三三カ所訪問した結果、そのうち少なくとも一四カ所にはムスリムが居住していたことを確認した(王 2004; 2006a)。

II 切れる本国との絆、生み出される「連帯」

――雲南系漢人・ムスリムによる移民共同体

以上のように、北タイの雲南系ムスリム社会は一枚岩ではなく、多様な出自をもつ共同体として形成されてきた。

しかし、彼らは中国を離れて以来、新たな社会状況に直面するにあたっては絶えず社会的紐帯を再構築することによって、共同体としての存続を維持してきた。

たとえば、第一の移住波にあたる一九世紀の北タイにおける雲南系ムスリムは、その地にすでに定着していたインド・パキスタン系ムスリムと宗教的な紐帯を形成した。インド・パキスタン系ムスリムは同時期、布や食肉業を北タイで展開する商人として活躍していた。雲南系ムスリムにとってはハラール食品を営むインド・パキスタン系の存在は生存維持の上でも、宗教的な共同体を創り出す上でも重要な役割を果たした。そのことを示すように一九世紀末にはチェンマイ県チェンマイ市に雲南系ムスリムとインド・パキスタン系ムスリムの共同によるモスクが創建されたのである（王 2006b; 2009）。

第二の移住波においても雲南系ムスリムは戦略結婚を通じてビルマ在地の民族と関係性を築いている。すなわち、

一九世紀末に雲南系ムスリムが雲南を離れて新たに定着したビルマの土地は、もともとワ族の支配下にあった。雲南系ムスリムは彼らと戦争を繰り返しながら集団を維持しつつ、他方ワ族との婚姻関係を取り結ぶことによって移民社会を展開してきた（Forbes 1988）。北タイの雲南系ムスリムの家系にはこのワ族との結婚によって生まれた子孫がいまなお生きている。

しかし、北タイにおける雲南系ムスリム社会の形成過程に最も大きな影響を与えたのは雲南系漢人である。上述した移住波の区分に従えば、第三波の時期に相当する。一九四九年前後の中国本土は共産党と国民党の内戦で荒廃し、社会情勢は不安定であった。結果的に中国共産党が勝利し、中華人民共和国が成立したが、敗北した国民党軍は台湾に逃れ新政府を樹立した。その一部の国民党軍部隊は台湾には行かず、ビルマやラオス周辺に陸路で逃げた。このうち、タイに逃れた国民党軍部隊は雲南出身者を中心に組織され、しかもその多数は漢人であった。他方、同時期の中国では、軍人のみならず商人や農民などさまざまな階層からなる民衆が隣国のビルマに新たな生活の糧を求めて避難した。[※]このなかに雲南系ムスリムも含まれていた。

雲南系漢人の中国からビルマへの敗走とその苦難の歴史は、おもに国民党軍による手記などによりすでにその一部が公開されている。それとは対照的に、雲南系ムスリムの

越境史や漢人との接触について書かれた資料はほとんどない。そのため、北タイにおける雲南系移民社会の歴史は国民党軍の視点に偏り、同時代を生き抜いた雲南系ムスリムの人生や移住後の諸事実は、移民一世の私的な記憶として個々人のなかに仕舞い込まれているにすぎない。

国民党軍が共産党に敗戦しビルマに逃げ込んだとき、その兵力はいちじるしく減少していた。しかし、台湾で新政府を樹立した国民党政権の采配により、ビルマに残った国民党軍は兵力を立て直し、軍事力増強作戦を展開した。軍の即戦力を養成するため「雲南反共救国軍」という部隊が作られ、当時ビルマに避難していたさまざまな民族的背景をもつ民衆や避難民が軍人として吸収されていた。

その軍事活動の諸過程のなかで、雲南系漢人中心の国民党軍が戦力として目につけたのが雲南系ムスリムであった。その背景には、雲南系ムスリムが歴史的に雲南、ビルマとタイ国境の間で地域間交易に従事する商人層が多かったことや、彼らは交易の経験上、これらの地域の地理に詳しいだけでなく、馬やラバといった運送手段をもっていた点がある。漢人主体の国民党軍は、商人層のムスリムを軍の幹部に抜擢することで、ムスリムの所有する財力や馬・ラバといった輸送手段とその商業ネットワークを手中に治めた。当時ビルマやタイ一帯に広がって居住し、あるいは商売をしていた雲南系ムスリムの商人に声をかけ、彼

らに軍への協力を要請した。あるものは国民党軍幹部に抜擢され、軍事的出世を遂げた。またあるものは軍属ではないが、徴用された。

その結果、雲南系ムスリムは国民党軍の「反共」という大義名分に取り込まれつつ、戦争に参加、あるいは巻き込まれていく。国民党軍は、台湾やアメリカなどの援助のもと、何度もビルマ／雲南国境から中国へ攻撃を行い、政権の奪回を狙い、軍事増強策を展開した。しかし、不法占拠して展開された軍事活動はビルマの反感を買い、国民党軍人のみならず、民衆や商人の雲南系ムスリムも個人ではなく集団としてビルマ政府から敵視され、ついには中国と連合したビルマ軍からの攻撃を受けた。その結果、一九五三年と一九六一年に国連の通達により、国民党軍部隊はビルマから撤退することになった。雲南系漢人、雲南系ムスリムともにビルマを追われ、一部は台湾へ、一部はタイへ逃れたのである(王 2007: 2008a)。

Ⅲ 移民社会の再編

1 台湾を後ろ盾にする漢人

しかし、冷戦によって利害関係をもった雲南系漢人と雲

南系ムスリムであったが、彼らの生活基盤がタイに変わる
ことによってその関係性はしだいに変化した。ビルマから
タイへの本格的な移住が始まったのは一九五三年以後であ
る。この時期を転機として、タイービルマの国境沿いには
上述した多数の雲南系漢人と雲南系ムスリムの「難民村」
が形成されていく。この村の特徴は、主に軍人層からなる
漢人と商人層からなるムスリムが混住している点にある。

その後、一九六一年の国連通達を受けて、国民党軍の第二
次撤退が決定し、ビルマに残留していた国民党軍の主要部
隊が再度タイ国境に拠点を移した。その結果、タイービル
マ国境には「難民村」が増加したのみならず、国民党軍の
ヘッドクォーターもチェンマイ県とチェンラーイ県の二カ所
に設置された。その結果、軍人の数が圧倒的に増えた。そ
れは、雲南系漢人人口の増加を示し、雲南系ムスリムの周
縁化をもたらした。

「難民村」における生活は雲南系漢人、雲南系ムスリム
を問わず、彼らが不法入国者であること、アヘンの密売の
容疑があること[※]、軍人においては武器を所有していること
などの複数の要因によって、タイ政府から庇護をもらうこ
とは難しかった。むしろ、さまざまな差別や隔離政策が雲
南系社会全体にしかれた。その後、一九六〇年代末、国民
党軍がタイ国内ならびにその国境域における共産ゲリラ撲
滅を目指すタイ政府に軍事的協力することを契機とし

て、雲南系社会はしだいにタイ国家に統合されていく道を
歩んだ。しかし、国籍、生活やインフラ基盤の整備などの
問題の即決にはいたらなかった。

こうした苦境のなか、軍を後ろ盾にした雲南系漢人は移
民社会の再構築の上でさまざまな社会的資源を有してい
た。すなわち、彼らが同胞であると考える台湾政府から政
治的、経済的支援を引き出すことができたのである。たと
えばタイ国内で、雲南系社会に対する移民政策が打ち出さ
れたとき、まっさきに国籍取得の対象として考慮されたの
は、国民党軍人たちであった。その背景にはさまざまな政
治的利害と当時のタイ政府の国内事情とが複雑に絡み合っ
ていたが、タイ政府との交渉権や発言権を握っていたのは
国民党軍人、すなわち主に雲南系漢人であった。結果的に
雲南系漢人は台湾政府を味方につけ、一九七〇年代以後、
段階的にタイ国籍が付与されたのである。

また、雲南系漢人には台湾に住む軍人同胞がいたことも
政治力、財力を集積するうえで有力なネットワークとなっ
ていた。その典型が北タイ国境沿いに作られた中華学校で
ある。現在、北タイには九〇カ所以上の集落があるといわ
れているが、おおよそ一集落には一カ所の中華学校がある
とされる。中華学校の設立と経営資金はおもに台湾からの
援助による。このように台湾側は積極的にタイの国民党軍
を対象にして援助と支援活動を行ってきた。その過程には

台湾政府とさまざまな葛藤も多々あったが、結果的には国民党軍人は台湾から医療・教育・インフラ・農業技術など多方面にわたる援助をとりつけることに成功している（王2008b）。

2 雲南系ムスリムのネットワーク形成

さて、雲南系漢人の大多数が国民党軍の一派に属していたのに対して、雲南系ムスリムには軍関係者もいれば、軍属でない商人や一般人、また国民党軍がタイに南下する以前からすでにタイに定着していた先駆的グループなど、その内実は多層であった。チェンラーイ県M村に住む四〇代の雲南系ムスリム二世のY氏は、父が雲南の西双版纳にある景洪出身で、一九四九年前後に雲南を離れ、一九五〇年代にビルマで雲南系ムスリムが統率する国民党軍部隊に入隊した。M村には二〇〇七年八月の時点で、約三〇世帯の雲南系ムスリムが居住していたが、そのほとんどが元国民党軍人の家族やその末裔である。この地に国民党軍が集落を築いたのは一九六〇年代初頭である。この村は、一九八〇年代半ばに当時の国民党軍第五軍の軍長であった雲南系漢人の段將軍が死亡するまで、雲南系漢人の統率下にあった。当地に住む雲南系ムスリムの軍人は雲南系漢人と政治的、経済的にも利害を共有し、台湾からの支援を受

けていた。

しかし、軍人筋の雲南系ムスリムとは対照的に商人層の人々は軍を基盤にした漢人とはメンタリティの上でも、宗教や文化基盤の上でも多くの違いがあった。ビルマにおいて祖国奪回を目的とした「反共戦争」という大義名分がもはやなくなり、タイにあらたに移住し始めた雲南系ムスリムにとって、雲南系漢人との共存は同床異夢にすぎないことがしだいに認識されてきた。雲南系ムスリム商人は、タイに再移住後、再び国民党軍や漢人に義理をたてて関係構築を維持する必要はないと考えた。軍との距離感をもたらしただけの背景には個々人によってさまざまな違いがある。例えば、「ムスリムはもともと商人であったが、ビルマで国民党軍が戦争を始めたのがきっかけで、戦争にいやおうなく巻き込まれた。国民党軍がビルマに入ってこなかったら自分たちの商売だけで生活していくことができた」という語りがある。こうした発言をする人々には、親族が国民党軍に徴用され戦争で死亡した人や、軍に馬やラバを供出するように命令を受けたなどさまざまな実体験がある。雲南系ムスリム商人は「反共戦争」を負の経験として記憶し、雲南系漢人と歴史的経験を共有しがたいのである。

その後、こうした歴史の記憶は個人の行動と結びつき、さらに集合的な行動を引き起こすようになった。例えば、雲南系ムスリム商人は、タイに移住後しばらく国境沿いに

形成された「難民村」で雲南系漢人と一時的に混住したが、ムスリムの先駆者が住むチェンマイ市に再移住を試みるようになった。そして、雲南系漢人の移民社会が台湾からの援助を引き出しながら発展し、社会生活が整備されていくのを横目でみながら、雲南系ムスリムは独自のネットワークで自力更生する道を模索した。その際、彼らが頼みにしたのが、ムスリムとしての宗教ネットワークであった。雲南系ムスリムをめぐる宗教ネットワークには民族内、民族間、国境を越えたレベルによって多層化し、その関係は相互に運動している（王 2009）。

定着初期において重要な働きをしたのが、タイ国内における雲南系ムスリム同士の相互扶助である。筆者がおもに調査したチェンマイ県では、最初の生活基盤の構築はバーン・ホー・モスクを中心に行われた。上述したようにこのモスクはチェンマイ市に位置し、一九世紀末にタイに移住した雲南系ムスリムのキャラバン商人たちによって二〇世紀初頭に創建された。それ以前の雲南系ムスリムは同地に住むインド・パキスタン系ムスリムとの共同モスクしか持っていなかった。

その後、二〇世紀後半になると、国境周辺に一時滞在していた雲南系ムスリムが次々とバーン・ホー・モスク周辺に再移住してきた。そこには先駆者と血縁関係を持つものもいれば、雲南という同郷のよしみで身を寄せる人たちも

いた。その後、こうした新規雲南系ムスリムの流入は増加し、新旧移民の相互扶助は勢いを増す。その結果一九六六年には、当初一階建てであったバーン・ホー・モスクが二階建てに再建されるほど、コミュニティは成長した。

ちなみに一九五〇年以後に中国を出国した新規移民のタイへの定着が進むと、新しいモスクも次々と北タイに誕生した。彼らの初期定着場所に沿って、これまでムスリムが住んでいなかったタイービルマ国境沿いの「難民村」に雲南系ムスリム間の相互扶助によってモスクが建てられた。二〇〇八年現在チェンマイ県には一七カ所のモスクが設立されており、新規の雲南系ムスリムによって建てられたモスクは六カ所ある。それらはすべて一九七〇年代から一九八〇年代の間に創建された。

さらに一九七二年には、新規移民の雲南系ムスリム一世の主導のもと、北タイにはじめてイスラーム学校が創設された。それ以前には、ムスリムの子弟たちは平日の夕方や土・日に各人の通うモスクに集まってクルアーンやアラビア語について勉強していた。しかし、モスクはあくまで補助的な学びの場であり、宗教を専門的に教育する場ではなかった。移民として、とくにムスリムとして外国で生き続けていく上で、次世代の宗教知識人の養成は不可欠であった。こうした問題を解決すべく、雲南系ムスリム一世は国内外のムスリムからの財政的支援を得ることに奮闘した。



写真1 チェンマイ県バーン・ホー・モスクで行われた断食明けの祈りをする雲南系ムスリム

圧倒的な資金提供者はタイ国内に住む雲南系ムスリムたちであったが、当時北タイに偶然足を運んでいたサウジアラビアの商人の目に彼らの宗教活動がとまり、それがきっかけとなり、多額の寄付がサウジアラビアから寄せられた。このほか海外からの寄付では、マレーシアや中東のカタール、リビア、アラブ首長国連邦、クウェート、チュニジア、バーレーン、オマーンなどのイスラーム諸国がある。しかし、中東を中心としたムスリムからの寄付とは対照的に、台湾やビルマ、中国のムスリム同胞からの寄付は一九七〇

年代の時点ではほとんどないに等しい。台湾の寄付は寄付総額の1%にも満たない。これは、雲南系漢人が台湾から支援を受けてコミュニティを再生していた点とは対照的である。また、当時国境を閉ざしていた中国からは一銭も援助がなかった。その理由として、改革開放政策以前の中国とは連絡手段が物理的に断たれていた点があげられる。

以上のように、タイに定着後の雲南系ムスリムは軍人の出自をもつグループと商人層を基盤にしたグループとに大別できたが、前者が雲南系漢人との共存を模索したのに対して、後者はムスリムとしてのアイデンティティを拠り所に民族的な差異を超えて、非雲南系ムスリムと宗教ネットワークを結び、コミュニティの形成とその発展に力を注いだ。逆にいえば、モスクや宗教学校建設に必要な寄付金は、この時点において国内のムスリムかあるいはイスラーム諸国とのつながりに頼むしか方法はなかったのである。

IV 中国と国境を越えたつながり

しかし、タイにおける雲南系ムスリムをめぐる閉塞状況も中国の政治経済的情勢の変化によって大きな転換を迎える。一九八〇年代から本格化する改革開放政策による国境

を越えたモノ、人、カネの流動化は、タイに住む雲南系ムスリムにも影響を与えた。祖国との断絶、ビルマにおける戦乱、タイでの差別といった一連の辛酸を乗り越え、北タイの雲南系ムスリムと故郷とのネットワーク形成がようやく可能となったのである。それは個人レベルから集団レベルまでまさに現在進行形で勢いを増している。また、彼らの故郷訪問や相互訪問はしばしば中国とタイ双方における宗教復興と表裏一体となっている。以下では、国境を越えた雲南系ムスリム相互のコミュニケーションの動態をモスク建築やマッカ巡礼の事例から考える。

北タイの雲南系ムスリムには、祖国に自分たちの妻子や両親、兄弟などを残してきた人々が多い。その中心は、ビルマで戦争を経験し、あるいはその余波を受けてビルマからタイへ再移住した人たちであるが、彼らは戦争の過程で故郷へ帰還する夢を一度は捨てたことがあったと語る。

中国への帰還とその交流の始まりは、期せずして、中国政府からの呼びかけによるものであった。一九八〇年代初頭、雲南省、四川省、山東省、広東省、浙江省、寧夏回族自治区、安徽省などの政府関係者がはじめてチェンマイを訪問した。当時、この訪問に関わった李氏によると、これまでタイには雲南会館という雲南系の漢人とムスリムが合同で運営する同郷会館があったが、この組織は台湾と雲南系社会を媒介するのが主な役割であり、中国を相手にする

公的団体ではなかったという。そこで、雲南系ムスリム一世のリーダー、とくに商人層が集まって相談した結果、雲南系ムスリムだけの同郷会を作ろうという運びになり、「旅泰清邁伊斯蘭同郷」という組織を立ち上げた。当時タイ国家から公益団体として正式に認可されていなかったが、中国からの外交使節がチェンマイに訪問するたびに、彼らも他の華人団体と同様に接見した。こうして雲南系ムスリムは雲南系漢人とは異なる政治的、宗教的帰属を公的場面において表出し始めたのである。

中国の代表団との接触に弾みを得て、その後、雲南系ムスリムたちは家族単位で故郷に足を運んだ。帰郷者は村人から「座客」という手作りの食事による手厚い接待を受ける。村人は外国からの帰郷者を引き止め、食事と団欒を楽しむ。そのため、帰郷者は多いときで一日五回も異なる家で食事をする事になり、腹をすかせる暇もなく村内を転々と挨拶代わりに食べあろく。こうした故郷におけるさまざまなエピソードを語り、祖国で親族・知人と一緒に撮った数々の写真を見せながら思い出話をするのが、いまでは在タイ雲南系ムスリム一世たちの楽しみにもなっている。

その後、故郷訪問の頻度が高まるにつれ、中国とタイに住むムスリムは離散した親族間の安否を確認しあうのみならず、双方の宗教事情について情報を交換するようになって

た。タイ側のムスリムはその過程で、毛沢東政権下における宗教政策の影響で中国におけるムスリムが不条理かつ劣悪な状態に置かれていた歴史を知ることになる。そうした中国の実態を把握するにつれ、在タイ雲南系ムスリムによる故郷訪問はしだいに宗教的な様相を帯びてきた。筆者は一九九八年から二〇〇〇年の間に故郷訪問に四回随行したことがある。そのうち二度が北タイにある雲南系モスク主催の故郷訪問ツアーであった。一度目は雲南南部の開遠県、二度目は西部の騰冲県である。二回とも故郷訪問を掲げていたが、その内実はモスクの落成式への参加が目的であった。

もともと、中国との国境が閉ざされていた状況にあっても雲南系ムスリムの一部は宗教的な支援を水面下で行っていた。たとえば、雲南系ムスリム一世の合氏は雲南省保山市にある故郷の村から連絡を受け、一九七六年ごろ、母村にイスラーム学校を建設するため建築費用一万五千元を寄付した。当時、合氏はタイのバンコクまで息子呼び寄せ、金を直接手渡した。またその前後の時期には、地震により一部破損したモスクを修復するために二千香港ドルを寄付したという。また、一九八一年にはイスラーム学校の校舎の建設費用として五万元を送った。教室に加えて、女性用の礼拝堂、トイレ、台所などを増設するためである。さらに同時期、モスクの叫拝楼（ミナレット）が壊れたという

連絡を甥から受け、約一五万元を送金した。イスラーム学校はその後落成したが、中国にまだ帰国できる状況ではないと判断し、合氏は式典には参加しなかった。

このように、タイでの暮らしが安定すると雲南系ムスリム一世は、故郷の宗教復興のために資金援助を密に行った。その後、送金だけを頼りに行われていた宗教支援は、改革開放の流れを受けて、カネとともに人そのものが移動することで活発化した。その一例が、二〇〇〇年一月、チェンマイ市バーン・ホー・モスクで実施された故郷訪問ツアーである。ツアーの旅程は約一週間であった。一週間の内容は一日目、二日目、三日目は騰冲県、残りの日程は、雲南の西部にある大理や麗江といった観光名所をめぐることに当てられた。しかしその眼目は、企画者である明氏の故郷におけるモスクの落成式であった。参加者は明氏の一族やバーン・ホー・モスクの教区、チェンラーイ県からの雲南系ムスリムを含めて約二〇人強が参加した。明氏は故郷における宗教復興について次のように語ってくれた。

「モスクの再建を考えたのは六年前です。故郷のムスリムは、他の地域に住むムスリムの生活状況にくらべて劣っていると思いました。モスクを建てることは中国にとつていいことだと思います。雲南省のなかでこうした海外華人によるモスクの建築は自分をはじめ

です。今回は宗教学校とモスクを建てました。断食があらたに学校を開始して、当面はークラス二〇人ほどから始めてみようと思います。先生はアラビア語ができる人を他の地域、たとえば昆明、北京、寧夏回族自治区などから呼びたいと思います。生徒は一年生から六年生まで、学費、宿舍費、食費や洋服などは寄付してあげようと思います。モスクが建てられた土地は、もともと自分の土地で、土地改革によって接収されましたが、その後、その一部をまた買収しました。また、モスクにはもともと田があったので、それら二つの土地を合わせてモスク建設のための土地として準備しました。祖父がモスクを修築したときは、人口も何十人ぐらいしかいなかったと思います。それが、今は三〇〇人ほどで、約七〇世帯の住民がいます。自分の家はもともと地主でした。村のなかで地主は私の家だけです。そして、この村から海外に移住したのは後にも先にも自分だけです。」

明氏はモスクの再建にあたり、中国国内外のムスリムから合計約六〇万人民元の寄付を募り、明氏自身も約五〇万円を寄付をした。その際、明氏はタイに住む雲南系ムスリムや、親戚がいる台湾やビルマの雲南系ムスリムからも精力的に寄付を依頼した。その結果、タイではおよそ七万元、台湾やビルマをあわせて約二万元が集められた。今回の故

郷訪問ツアーの参加者は、タイで寄付活動に協力した人たちでもある。もつともタイのチェンマイ県イスラーム協会にも寄付の依頼を打診したが、協力は得られなかった。

故郷訪問と中国における宗教復興を一体化させる明氏とはどのような人物か。訪問を終えての聞き取り調査からその苦難の移住史を聞いた。彼は一九五〇年に雲南の騰冲県で生まれたが異母兄弟に囲まれて育つ。しかし、その兄弟たちの中には後に共産党の弾圧を受けた者がいた。一人は死亡、一人は難を逃れるが後遺症で精神障害を煩う。苦渋の家族環境のなか、彼は一九六〇年、若干一〇歳の若さで単独ビルマへ移住した。ビルマには親戚が住んでいた。母もその後息子を追ってビルマに移住する。ビルマでは翡翠などのビジネスで財をなしたが、一九六二年のネーウインの政変で危機を察知し、タイに再移住した。その後、中国との国境が開かれると中国とタイを結ぶ貿易業を展開し財を築く。

明氏のケースは雲南系ムスリム一世が「難民」から華商へと転身する成功例を物語っている。彼らは雲南という出自を活かし、貿易業、観光業、食品の卸売りなど中国とタイを結ぶビジネスに従事し、タイにおける社会的上昇を果たしていく。しかも、彼らはそこで蓄積した資本をさらに故郷への宗教復興に投資していくのである。しかし、国境を越えて宗教復興に荷担するには戦略を必要とする。雲南

系ムスリムの場合、彼らは故郷への経済的投資によって巧みに現地の官僚を味方につけ、昵懇の「関係」を築き上げ、共産中国が煙たがる宗教分野へ介入していく。たとえば明氏の場合、村でのモスクの落成式終了後、県政府による歓迎会が準備されていた。明氏のみならず、筆者を含むタイからの故郷訪問参加者も手厚いもてなしを受けた。その場には中国の政府関係者として騰冲県書記、騰冲県協主席と副主任、騰冲県人民代表大会、騰冲県旅遊局長、騰冲県交通局長、保山地区僑辦主任が列席していた。

以上の事例は、故郷訪問が単なる親族や知人との親睦にとどまらず、現地の官僚を含めたインフォーマルな人間関係、信頼関係によって支えられ、それはおもにタイで成功したムスリム系華商達の手によって形成されていることを示している。特に、タイ側の移民にすれば、この行為は移民個人が故郷で錦を飾り、自らの故郷におけるプレゼンスや威信を高めることにも繋がり、官民双方に利となるのである。

V マッカ巡礼にみるムスリム・

アイデンティティの再構築とその困難

このように中国の改革開放は、故郷との繋がりを念願し

ていたタイ雲南系ムスリムに新たな宗教実践を広げるチャンスを与えた。しかし、それが個人レベルにとどまらず、集合的な様相を帯び、しかも宗教色が強まる場合には事情は異なる。それが以下に述べるマッカ巡礼の事例である。マッカ巡礼は、タイ語ではタムハット (tham hat)、中国語で「朝覲」という。巡礼を終えてきた人たちは、タイ語でハッジ、中国語で「哈吉」と呼ばれる。

北タイで最も早期にマッカ巡礼を果たした雲南系ムスリムは、バーン・ホー・モスクの創設に関わった鄭氏である。鄭氏は、一九世紀末にタイに移住し、当時盛んであった馬やラバによるキャラバン交易によって財を築き、雲南系ムスリムのコミュニティ作りに势力的に関わった人物である。鄭氏は一九六四年にマッカ巡礼を行い、その地で「帰真」(死亡)した。

その後、中国やビルマから避難してきた第二波と第三波の雲南系ムスリムが北タイに合流して以後も、やはりマッカ巡礼は重視されてきた。しかし、それを実践するには二つの問題に直面した。第一に、ビルマから避難民として新たにタイで生活を築き上げていた多くの雲南系ムスリムには経済的余裕はなかった。第二は、彼らは合法的に入国したわけではなかったため、移住当初その多くがタイ国籍をもっていなかった。この第二点は重要である。雲南系漢人主体の国民党軍が一九七〇年代以後、タイ政府から国籍取

得の条件を緩和され、タイ国民への道が開かれたのに対して、商人層の雲南系ムスリムは枠外であった。雲南系ムスリムは国外に出る法的条件を満たすため、厳しい国籍取得の条件をクリアするか、あるいは非合法の手段を使ってタイ国籍を取得することで、ようやくマッカ巡礼に必要な旅券を獲得できたのである（王2008）。国籍取得者人口も多くなかったため、移住当初のマッカ巡礼はその規模も小さくかつ個人単位であったという。後発移民のなかで比較的最初にマッカ巡礼を果たした馬氏は、「一九七七年にマッカ巡礼に行きました。当時まだ雲南系ムスリムは経済的に苦しく、マッカ巡礼に行ける人はほとんどいなかった。（中略）私は友人と三人でマッカに行きました。そのとき、アラビア諸国に友人がいたので、友人の家に泊めてもらった、宿に泊まったりしました。その時期にマッカに行くことは簡単なことではなかったのです」と語る。

しかし、一九九九年に北タイで調査したときに筆者が目当たりにしたのは、雲南系ムスリムによるマッカ巡礼団であった。彼らはマッカ巡礼に行くための便宜を図るため、雲南系ムスリム自身によって専門の旅行会社あるいは代行業を組織していた。一九九九年の調査時点で確認できたのは四つである。

① A社……巡礼だけを目的としたツアー会社である。

オーナーは二人の雲南系ムスリムである。一人はチェ

ンラーイ県メーサイ市教区員で、タイ生まれ。雲南の祖籍は峨山である。もう一人は、チェンマイ県にあるバーン・ヤーンという「難民村」の教区員である。雲南の祖籍は不明である。調査当時、かつてバーン・ヤーン・モスクのイマームをした経験がある。A社は、タイに住む雲南系ムスリムを対象にしたマッカ巡礼会社として約六年前に作られた。

② B社……一人の雲南系ムスリムによって作られた。

巡礼だけのツアーかどうかは不明である。オーナーはチェンマイ市サンパコイ教区員の雲南系ムスリムで、一九七四～五年ごろ、雲南省通海県の古城からタイに移住してきた。オーナー自身はマッカ巡礼には行かず、チェンマイのイスラーム学校である敬真学校の卒業生で、サウジアラビアのマディーナに二～三年留学した経験をもつ雲南系ムスリム二世が巡礼団を引率する。会社は三～四年前に設立された。

③ C氏……ツアー会社を作っていない。C氏と異母兄

弟の妹とその夫を含めて三人でマッカ巡礼の時期になるとツアーを組織する。C氏は一九七〇年代に雲南の開遠県からタイに移住してきた。異母兄弟の妹はビルマ生まれの雲南系ムスリムで、タイで成長した。彼女の夫は、南タイ人のムスリムで、現在バーン・ホー・モスクに付属する宗教学校の校長となっている。三人



写真 2 1999 年に実施されたマッカ巡礼に向けた合同集会。写真を撮っているのがチェンマイの雲南系ムスリムで、集合写真のため並んでいるのが中国やビルマから参加したムスリム

ともバーン・ホー・モスクの教区員である。三人のうち、C氏が巡礼の勧誘やその代行業を請け負うが、マッカ巡礼に行くのは異母兄弟の妹夫婦である。いつごろ巡礼団を組織したのかは不明である。

④ D氏……ツアー会社をもたないが、旅行ガイドを職業にしていた。ビルマ生まれの雲南系ムスリムで、その後タイに移住する。メーホンソーン県パイ郡の教区員である。すでに各種ツアー業を始めて二十数年になるという。一九九二年には旅行会社社に雇われてツアー

コンダクターと通訳をかねて、タイに住む雲南系ムスリムをマッカ巡礼に引率した。一九九四年には別の旅行会社に移り、引き続きマッカ巡礼の業務を行った。一九九九年には再度別の旅行会社に移り、今日にいたる。

巡礼団の組織者は、それぞれチェンラーイ県、メーホンソーン県、チェンマイ県と異なった教区に属している。彼らはマッカ巡礼の参加者を呼び込むため、自分の教区以外にも宣伝する。こうした情報は口コミで雲南系ムスリムの間に広がり、マッカ巡礼は北タイ各地の雲南系ムスリムが相互に乗り入れ、知り合う場として機能している。参加者は、ツアーを組織する人の人柄や、巡礼にかかる費用や現地におけるサービスを考慮し、自分たちの好みで巡礼団を選択する。価格は、七万八千バーツ、八万バーツ、八万八千バーツ、九万バーツなどがある。筆者が親しくしていたバーン・ホー・モスクの教区員は、上述したC氏とおなじモスクの顔見知りであるにもかかわらず、チェンラーイ県のAさんの巡礼団に申し込んでいた。このように、参加者の好みによって巡礼団を選択するので、四つのグループも毎年、参加者が変動する。一九九九年の時点でその規模は、A社は一〇〇人強、B社は四〇人強、C氏は二〇人強、D氏は四四人であった。そして巡礼団がいずれも一九九〇年代初頭から半ばにかけて組織されていること

から、この時期から雲南系ムスリムのなかで巡礼人口が増加し、それに伴い巡礼団が組織されたと考えられる。

こうした巡礼団の組織化において注目すべきは、参加者のなかに中国やビルマの雲南系ムスリムが参加していたことである。D氏によるとおおよそ一九九六、七年から中国やビルマからの参加があるという。

一九九九年にD氏が組織していた巡礼団の参加者の内訳は次のようである。

北タイ（一六人）

バーン・ヤーン教区員一人、パイ教区員一人、チェ

ンマイ市一四人

ビルマ（一〇人）

ヤンゴン二人、タウンジー二人、マンダレー二人、ター

キレック二人、ラシオ一人、タンヤン一人

中国（一七人）

雲南省―峨山一人、通海四人、内蒙古自治区二人

このようにD氏の巡礼団は三つの国から計四三人が参加している。北タイ一六人、ビルマ一〇人、中国から一七人である。中国から巡礼希望者が加わっている背景には、中国では毎年マッカ巡礼の参加人数が制限され、しかも北京経由という事情があった。雲南のムスリムにとって、わざわざ北京経由で行くのは面倒なばかりではなく、加えて農村に住む彼らはなかなか巡礼者としての資格を与えられな

いという。そのため雲南のムスリムたちは、北タイに移住した親族と連絡をとりあって、彼らの親族関係を使ってマッカ巡礼を行う。彼らはこのルートを「後門（裏口）」と呼ぶ。しかし、こうしてタイ以外の国から巡礼者を受け入れるには、煩雑な手続きが必要となる。D氏によると、中国やビルマの雲南系ムスリムは、「親族訪問」という名目でタイに入国し、その書類申請のため、タイ側の親族が書いた招聘状と受け入れ親族の身分証明書を添付する。

たとえば、筆者が親しくしていた北タイ生まれの七〇代になる雲南系ムスリムの女性は、一九九八年の巡礼で、雲南から亡き夫の親族を呼び寄せた。雲南に住む夫の弟の妻と、夫が「兄弟」と呼んで親しんでいた同世代の親戚の孫、計二人を雲南から受け入れた。この女性のように、実際に血縁関係のある人を巡礼者としてタイに入国させる場合もあるが、親族ではない場合でも、擬似的に「親族」として申請する。たとえば、バーン・ホー・モスクに属する七〇代のある教区員は、自分の故郷にいる知り合いの息子を、「甥」として申請書に書いた。

このようにいったん「親族」としてタイに入国させた後、マッカ巡礼の組織者はさらにマッカ行きのための入国ビザや飛行機チケットなどの諸手続きを一括して請け負う。組織者が諸手続きを準備している間、雲南とビルマからきたムスリムたちは、親族や知り合いの家、あるいはムスリム

が経営する旅館に泊まる。彼らの滞在期間は人によって異なるが、ビザなどの諸準備のため、少なくとも一週間以上北タイにとどまる。その間、彼らは観光をかねて、北タイの各地に住む雲南系ムスリムのモスクや同胞に会いに行く。諸準備が整うと、巡礼団はチェンマイを出発し、バンコクから国際線に乗り換えてサウジアラビアへ向かう。

こうした北タイと中国ならびにビルマの雲南系ムスリム間の交流は、マツカ巡礼者のみならず、巡礼には参加しない地元の雲南系ムスリムにも開かれている。それが、巡礼団を対象にした歓送会と巡礼講習会である。歓送会は一九九九年三月一日にバーン・ホー・モスクで行われた。

会には巡礼参加者のみならず、巡礼を見送る北タイ各地の雲南系ムスリム教区員が参加した。参加者は全員一律一人二〇〇バーツを寄付する。集められた寄付金は食料などの諸経費にあてられ、中国、ビルマ、そして北タイの雲南系ムスリムが一同に集い食卓を囲んだ。三月六日には、サンパコイ・モスクと敬真学校の主催で、巡礼に出発するムスリムのための宗教講習会と健康診断が午前中に行われた。

このときの参加者には、歓送会と同様に、巡礼者だけではなく、巡礼者を送迎するために集まった親族や知人も含め男性約四〇人、女性約八〇人であった。

この宗教講習会の目的は、マツカ巡礼の予行演習である。講習会にはチェンマイのイスラーム協会の会長、副会

長も参加する。彼らによる挨拶の後、講習会の大部分は、巡礼の手順、衣装、持ち物などを説明するために時間が費やされる。参加者には中国からのムスリムも含まれているため、説明は中国語とタイ語によって行れた。巡礼の説明は、チェンマイ市内にあるインド・パキスタン系の宗教指導者一人と雲南系ムスリムが一人である。宗教に関連した知識の伝授や説教にはインド・パキスタン系の宗教指導者に協力を依頼するのである。このように、雲南やビルマからの巡礼参加者は、北タイの雲南系ムスリムによる手厚い接待と歓迎を受ける。参加者にとって、同じ民族的出自を共有する安心感と交流によって得られる宗教上の情報交換は何にも代え難い機会であった。

このようにインフォーマルに形成された合同マツカ巡礼であったが、こうした行為はしだいに中国、タイ双方の政府の監視の対象となった。巡礼の時期になると雲南とチェンマイの国際空港では次から次へとイスラームの装束をまとったムスリムたちが往来する。その姿をみた両国空港関係者や政府役人の不信感を煽り、ついには在チェンマイ中国領事館からクレームが北タイ雲南系ムスリムに寄せられたのである。二〇〇五年に長期調査から五年へて再び北タイに戻ったとき、北タイ雲南系ムスリムの間では、合同で巡礼は行われていなかった。雲南からマツカに行く場合には、中国のムスリムは中国当局の許可をもらい、中国人の

巡礼団として中国から直接マッカに向かうことが義務づけられたのである。

合同マッカ巡礼を企画していたC氏は「採算が合わない。国が違う人たちと一緒に巡礼に連れて行くのは手続きが煩わしすぎる」と説明する。とりわけ、企画者が懸念したのは書類上の手続きである。雲南のムスリムはみせかけ上の「親族」をタイで探し出し、彼らの承諾を得て、中国からタイへ渡航するために必要な招聘証を準備する。この書類の手続きに加え、タイに入国後には、サウジアラビアへの入国のビザを申請する。その期間、巡礼団の企画者は参加者の安全とチェンマイにおける滞在先（ホテルや知人宅）などを確保しておく必要がある。また、マッカへの旅行中には中国人の好みにあう料理をあらかじめ準備するなど、余念がない。法の網の目をかいくぐってまで執り行う各種雑務は、苦勞多くして得られる利益は少ないという。

このC氏の発言から、国境を越えて組織化され始めたマッカ巡礼に対して中国政府側は警戒を強めたが、北タイ雲南系ムスリムは表だって抵抗することは避けたことが伺える。その結果、雲南、ビルマと北タイをつなぐ合同マッカ巡礼は頓挫した。タイの雲南系ムスリムにとっては、ムスリムとしてのアイデンティティを再確認し、再発見する場として中国とのネットワーク構築に腐心していただけに、この経験は大きな痛手であった。それ以後、タイの雲

南系ムスリムはバンコクにあるタイ人ムスリム巡礼団に合流する傾向が強まった。また中国のムスリムにとっては、改革開放政策により宗教政策は緩和されたものの、依然として自分たちが中国の国家により管理・監視対象下にあることを思い知らされる機会となった。

以上、合同マッカ巡礼が破綻した事例は、宗教を国民国家の枠組みのなかで個人の内面において維持することは可能であるが、国境を越えて汎地域的なネットワーク形成や宗教共同体となることへの強い懸念が国家側にあることを示唆するものである。

おわりに——越境者の地域像

本稿は、在北タイの雲南系ムスリムが移住前、移住過程、さらに定着後の社会のなかで、歴史的状況に柔軟に対応しつつ、多様な他者関係のなかで社会的紐帯を生み出していくプロセスを追ひ、その集積としてのネットワークの地域的な広がりについて越境者自身の歴史的経験を軸に記述した。具体的には、二〇世紀半ば以後の雲南系ムスリムの歴史的経験、すなわち戦争という危機的状況下における雲南系漢人との関係性に焦点をあて、その関係性のなかで雲南系ムスリムがいかにムスリムとしてのアイデンティティを

覚醒し、再構築していったのかについて述べた。

すなわち、雲南系ムスリムはビルマからタイへの移住過程において雲南系漢人と戦争を媒介として協力関係を結ぶが、定着化が進むにつれ、国民党軍を後ろ盾にする雲南系漢人との歴史的経験の差異を認識し、彼らとの共存というよりはむしろ差異化することでムスリムとしてのアイデンティティを獲得した。そして、ムスリムとして非中国系の同胞との共存を図りながらイスラーム環境を構築し、次世代の育成に向けてタイ社会に根を下ろし始めた。その後、雲南系漢人とは対照的に台湾との政治的経済的なチャンネルが薄い彼らは、中国に住むムスリム同胞に向けての宗教支援を行うことを通じて、故地とのコミュニケーションを濃密にし、故地を自らが生きる宗教的空間として再び取り込みつつある。しかし、国境を越えた宗教共同体の構築には依然として、「国家」という壁が立ちはだかっている例は合同マッカ巡礼の頓挫に端的に示されている。

このように移民の生きる地域とは、移民のもつ文化的資源によって社会的な紐帯が戦略的に結びつけられるだけではなく、移民自身の主観的な歴史的経験を反映しつつ、文化的意味づけや価値体系を伴った空間として絶えず再定義され、創出されていく場である。それは、行政や政府が制度として区画している「公認の地域」と異なり、移民の主観的な地域への認識と、移民間の相互のコミュニケーション

ンによって成り立つ「生きられた地域」として存在する。もっとも、誰のどのような立場から空間を認識するかによって結ばれる地域像は異なるだろう。とりわけ、移民とはそもそも歴史的経験の異なる多様な差異を内包する集団であるため、その差異ゆえに同一民族集団内においても不均等なネットワークやそれに基づく多様な意味空間の形成がみられる。本稿では、雲南系ムスリムのなかでも軍人層と商人層では彼らが築く他者関係や祖国との関係にも違いがあることを指摘した。今後は、こうした集団内部の歴史的経験の差異にも着目し、誰がどのような立場からネットワークを形成し、ミクロ・リージョンを構築しようとしているのかを解明することで、移民が主体的に生きる地域像をより多元化的に描き出すことが可能になると思われる。

●注

*1 本稿が対象とする雲南系ムスリムは中国における回族に相当する。回族の定義については中田 (2008) を参照のこと。

*2 移住当初の雲南系ムスリムと雲南系漢人はおもにアヘンの仲介に関与していたことが報告されている。その実態については焼き畑山岳民からのレポート、当時の状況を伝えるアメリカやタイの新聞記事などの分析を通じて明らかにされてきた。しかし、いまなおこの点について漢人であれムスリムであれ、明示的に語ろうとするものはいない。なぜなら、ア

ヘン問題、その精度を高めて精製されたヘロイン密売はいまでもタイ国内のみならず国際社会が目を光らせており、雲南系漢人と雲南系ムスリムは、たやすくスケープゴートとして逮捕されやすい政治的に不安定な環境に身を置いているからである。

*3 ビルマにおける雲南系ムスリムの移住については、吉松(2003)が参考になる。

*4 この時期の雲南省からの拉祜(ラフ)族の移住については、片岡(2004)を参照のこと。

●参考文献

王 柳蘭(2004)「国境を越える『雲南人』——北タイにおける移動と定着にみられる集団の生成過程」『アジア・アフリカ言語文化研究』六七号、二二—二六二頁。

——(2006a)『難民』から『華』人への道——戦乱と越境に生きる北タイ雲南人の民族誌」京都大学大学院人間・環境学研究科博士学位申請論文。

——(2006b)「北タイにおけるイスラーム環境の生成過程——雲南系ムスリムの事例から」『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容——制度・境域・実践』林行夫編、平成一五(一七年度)科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書(研究代表：林行夫)、八〇—一八四五頁。

——(2007)「移動をめぐる歴史的経験の重層性——タイ・ビルマ国境の雲南系漢族・雲南系回族の事例から」『社会人類学年報』三三三号、一七一—一八三頁。

——(2008a)『難民』を通じて移動を考える——北タイ雲南

系華人の事例から」李仁子・金谷美和・佐藤知久編『はじめとしてのフィールドワーク——自分がひらく、世界がかわる』昭和堂、一九—一三五頁。

——(2008b)「北タイにおける雲南人『難民』定着初期過程における生存戦略——国籍取得と台湾とのネットワーク構築をめぐる」『年報タイ研究』八号、五一—七〇頁。

——(2008c)「口承史からみた越境経験と交易の変容——中緬泰国境を渡った在タイ雲南系ムスリム移民の展開」『アジア・アフリカ地域研究』八巻一号、二二—五一頁。

——(2009)「北タイにおけるイスラーム環境の形成過程——中国雲南系ムスリム移民の事例から」林行夫編『境域』の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー」京都大学学術出版会、七三—一七八頁。

片岡樹(2004)「領域国家形成の表と裏——冷戦期タイにおける中国国民党軍と山地民」『東南アジア研究』四二巻二号、一八—二〇七頁。

栗原悟(1991)「清末民國期の雲南における交易圏と輸送網——馬帮のはたした役割について」『東洋史研究』五〇巻一号、一二—一四九頁。

中田吉信(1992)「中国における回族問題」『就実論叢』二二巻二号、一三—一五九頁。

濱下武志(2006)「華僑・華人史研究をめぐる東南アジアと東アジアの連続と断絶」『東南アジア研究』四三巻四号、三三—三四五頁。

吉原和男・鈴木正崇・末成道男編(2002)『血縁』の再構築——東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社。

吉松久美子 (2003) 「ミャンマーにおける回族（パンデー）の交易路と移住——一九世紀後半から二〇世紀前半を中心に」『イスラム世界』六一号、一一二五頁。

Chang Wen-Chin (1999) *Beyond the Military: The Complex Migration and Resettlement of the KMT Yunnanese Chinese in Northern Thailand*. Ph.D. Thesis, Katholieke Universiteit Leuven.

Forbes, Andrew D.W. (1988) *History of Panglong, 1875-1900: A "Panthay" (Chinese Muslim) Settlement in the Burmese Wa States*. *The Muslim World* Vol.LXXVIII, No.1: 38-50.

Hill, Ann Maxwell (1998) *Merchants and Migrants: Ethnicity and Trade among Yunnanese Chinese in Southeast Asia* (Monograph 41). New Haven: Yale Southeast Asia Studies.

Wang Liulan (2006) *Hui Yunnanese Migratory History in Relation to the Han Yunnanese and Ethnic Resurgence in Northern Thailand*. *Southeast Asian Studies* 44(3): 337-358.

(おう りゅうらん／京都大学地域研究統合情報センター・
日本学術振興会RPD)